

府中市史編さんだより

第6号 平成30年(2018)11月1日



上空からみた中河原駅周辺

ふちゅう温故知新⑤

中河原（なかがわら）

中河原村

中河原村は多摩川北岸に位置し、現在の住吉町、分梅町、南町の一帯に広がる村でした。中河原村という名は、室町時代にあたる応永22年(1415)の「鶴岡八幡宮社務職次第」によって「吉富内中河原村」として見られます。村の中央を鎌倉街道が南北に縦断し、それに沿って集落が形成されていたと言えるでしょう。

15世紀の中ごろの史料には「吉富郷(関戸郷内)の内6ヵ村の内1つに中河原村があります。現在では、多摩川を隔てて位置する関戸や一ノ宮(ともに現在の多摩市)との関係もうかがえます。

正戒塚

府中市内には多くの塚がありましたが、その内の1つが南町に存在したとされる正戒塚です。中河原村東にあったようですが、残念ながら江戸時代の多摩川洪水の時に流されてしまい、塚が消滅してしまいました。

有山氏と中河原

天正13年(1585)3月24日に出された小田原北条氏の重臣・松田憲秀の印判状(多摩市教育委員会所蔵)では、関戸の有山源右衛門が中河原村の正戒塚に新たな宿を開き、周辺の荒野を開拓することを認め、税を免除したとあります。関戸の住人であった有山氏によって中河原の開発が進められていったことが分かります。

元和3年(1617)4月に出された「覚書」(多摩市教育委員会所蔵)では、徳川家康の霊柩を日光へ移送する際、関戸などの村々が人馬の継立を命じられたとあります。これを請けた人物とされているのが有山源右衛門元貞で、供出した人馬は府中宿に集められました。

中河原村に縁の深い有山氏は戦国時代から江戸時代にかけてこの地域の重要な存在であったと言えるでしょう。

「周辺地域との関係性から考える新府中市史」

民俗専門部会長・玉川大学リベラルアーツ学部教授
八木橋伸浩先生

このコーナーでは、市史編さん専門部会の部会長の先生にインタビューしています。

今回は、民俗専門部会の八木橋伸浩先生からお話をうかがいました。

前回の府中市史民俗編について思うこと

事務局：前の府中市史（昭和49年刊行）を踏まえて民俗専門部会はどのような視点で調査を行なっていくお考えですか。

八木橋：前の府中市史民俗編の特徴の一つは、何といても宮本常一が取りまとめたことにあります。宮本常一という民俗学者は日本の都市研究というより、とりわけ島嶼（しょ）研究で知られた研究者で、島の生活を通して日本の生活文化の特質を把握しようと考えた人物です。そのような人物が「府中」に取り組んだ背景等についてはここでは省略しますが、それは民俗学を志す私たちにとっては大変刺激的なことです。宮本常一が府中をどのように見つめていたのかということをもっと一度見直し、その上に今の府中があるという姿を描いていきたいと考えています。

宮本常一がつくった府中市史というのは、これまで編さんされてきた市町村史でいうとかなり独特で特徴的な構成になっています。とりわけ冒頭の部分で府中の旧家が取り上げられ、その間取りや暮らしぶりから民俗的世界を描き始めるという構成は他に例を見ない、宮本独自の視点といえるものが注ぎ込まれた、当時でも斬新な市史でした。

私たちがこれを乗り越えていくというのは難しい作業ではあると思います。しかし、先人を乗り越えて、府中市と市民の皆さんにとって財産になるものにしたい、というのは民俗専門部会に入っている先生たち全員が共有するところだろうと思っています。だから今回、宮本常一が冒頭に記した記録が今どうなっているのか、というような切り口からあえて今度の市史（民俗編本編）の記述を始めようかと考えています。

以前は、自治体史の民俗編といえば、その土地の古老が語ってくれた昔の姿を記録する作業を中心に進められてきました。しかし、それを

前提にすると、もはや当時の古老は存在しませんし、民俗の記録としては前の市史である意味事足りてしまいます。そして、いまや明治のことを語れる話者もほぼいません。そこで、宮本が約50年前に府中市史に関わって以降、府中はどう変わっていったのか、あるいは宮本のときに意識されていたり大事にされていたりした民俗的事象が今の府中の生活の中ではどのように位置づけられているのかといったことに注目することにしました。もしそれが消滅してしまったとすれば、そこには暮らす人々の中でこれをあまり必要と感じなくなったからかもしれないわけで、そこにこそ、この府中で暮らす人々の心意のようなものが現れてくるはずだと考えるからです。

現在、府中に暮らす人々の生活は旧農村部と旧町場というように、単純に区切れるような世界ではなくなってしまいました。さまざまな生業に従事しながら、生活をしていく暮らしの拠点としてマンションやアパートにお住まいの方々も今たくさんいらっしゃいます。もっとも、そういう人たちにとっての府中での生活のリズムは何かという問題は、宮本の時代から既に考えられてきました。宮本のときにはもう、府中は昔のようなムラとマチの二項対立型の場ではなくなっていました。それが現在、さらに複雑化した社会の中で具体的にどのように変化し、多様化しているのかという点も、今回の市史編さん作業では欠かせない視点だと思います。

民俗学と自治体史

八木橋：もともと民俗学が対象としてきたのは「常民」と呼ばれる存在でした。民俗学が日本で立ち上がった当初は、「ごくごく普通の当たり前の人」を研究対象にするという感覚だったのです。具体的なイメージとしては稲作農耕民を対象にすることによって、日本の民俗の根源に迫っていけるのではないかというのが日本民俗学の創始者である柳田國男の考えでした。もちろん今、日本で一番普通の人々というのは稲作農耕民ではありませんし、むしろサラリーマンなどに変わっているわけです。でも、そうし



た社会の変化の中で引き継がれてきたものにごそしっかり目を向けておけば、時代を超えて守ってきたもの、語り継いできたもの、体験的に身につけてきたものなどを通して、府中という土地の特徴や地域性のようなものが浮かびあがってくるはずですよ。それが最終的には地域のための資料として残っていくのではないのでしょうか。

基本的に地域史の一つの有りようとして民俗的な世界を描こうとすると、その地域を掘り下げていくことに集中することになります。しかし府中は府中単体としてあるわけではなくて、周辺の市町村との関係性の中で府中はあるのだということに今強く意識しています。例えば、くらやみ祭にしても府中からずいぶん離れた埼玉県などから人が来ていたりするわけで、そうした場所との関係性の中で祭事が維持されているというところがあります。そのような関係性というものを改めて描きたいと思います。そうした関係性の中に府中はあるのだと。あるいは多摩川を挟んだ対岸との関係性とか、いろいろな意味で常に周辺を意識します。生活や文化におけるもともとつながり感というのは行政区分を越えたところがあるから、それを今回は見落とさないようにしたいと思います。

事務局：そうしますと、調査の仕方はこれまでの自治体史編さんにおいて行なわれてきたものとは違ったものになりますか？

八木橋：いいえ。ただ、すごく時間がかかります。これが民俗学のつらいところなのですが、民俗学は基本的に今生きている人、つまり現在ここに存在する人からお話を伺いながら、その中で

最終的には心意のようなものを汲み取っていく学問になります。このため人対人との関係の中で調査が進むので、いわば周辺とのつながり感とかそういったところにまで視点を向けていくと、時間も人もより必要になります。その点が今回の編さん事業の中でうまく遂行できるかどうかは課題の一つでしょう。大人数の調査団をつくって調査が行なえるわけではないので、制約のある中で可能な限り周辺との関係性も含めて幅広い視野の中で捉えていくという作業を進めていくつもりです。

例えば時代区分別の部会であれば、新しい事実が分かったらその事実を加えていくという発想である程度まとめあげていけるところがありますし、新しい解釈が出てきたときにはそれに対処しながら「これは府中ではどうなんだろうね」というスタンスで書いていけるのですが、民俗の場合は基本的に相手が文字資料ではなくて人です。人の記憶というのは不要になればどんどん忘れ去られていくし、忘れちゃいけないことであるからこそ記憶に残っていくわけです。そして、私たちは自分たちの生活文化について常に興味関心を持ちながら生きているわけではありません。普通に生活されてきた人たちから、意識されてきたか否かにかかわらず、生活の中に存在する民俗の有りようについてさまざまな話をお伺いしたいと思っていますので、これはやはり大変なことなのです。そういう意味でも、聞き取り調査が行なわれるにあたり、市民の皆さんにはどうか積極的なご協力をお願いしたいと思います。

民俗学が扱うのは基本的に口碑伝承です。口伝えの伝承というのを大事にしてきた学問であるがゆえに、文字として残っているものも重要視はしますが、それ以上に現実に今、ここにいる方々に語っていただいたものが貴重な資料になります。そして、そこを起点に描いていかなければ「今の府中」という立ち位置にはならないのです。

そして、時代が変わっても受け継がれてきたものという府中の精神性ともいえるような、そういうものはぜひ落とさずに拾っていきたいと思います。ですから平成30年に刊行した『府中市史民俗分野報告書（一）ライフヒストリーふちゅう』の中にはいろいろな職人さんに登場していただきましたが、ではなぜそうした職人

さんたちが府中には必要なんだろう、生き残るのだろう、という目線で本編は整理していこうと考えています。府中という昔から開かれた多摩地域の大きな拠点の中で、欠かせない存在だったからこそ生き残るのです。不要であれば始めから生じないし必然として存在しているわけなので、そうしたことを丁寧に描けば、府中の民俗というのはきちんと時間軸的につながりのあるものとして描いていけるはずです。

生活の場・都市郊外としての府中

事務局：今の府中にはどんなイメージがありますか。

八木橋：府中を生活の場としている人たちは多様です。府中に仕事のために来る人たちはひとまずおいておき、居住されている人たちのことを考えてみると、京王線やJRを使って仕事のために新宿へ向かう人たちもいれば、特に子育ての環境がいいという理由でこの地に来た人もいるかもしれないし、自然が豊富にあることを条件に府中に越して来た人がいるかもしれません。さまざまな利便性や生活上の好条件が府中にはあるでしょう。しかし何ととっても、府中駅を降りたときに「府中はやっぱりすごいな」と思わせるのは大國魂神社なのです。京王線沿線においてこれほどの存在感を示すものは他になく、府中という生活空間の中にあるシンボルとしての大國魂神社というのは、実はものすごく大事な存在だといえるでしょう。信仰の拠点とかそういった言葉で片付けるのではなくて、国府の時代からの象徴的なシンボルである大國魂神社、この拠点があることによって精神的なゆとりのようなものが府中にはあるような気がしてなりません。府中に暮らすと、大きな祭りだけではなく、生活空間の中にあのシンボルがあることによる安心感とか安定感のようなものが、市民の心のよりどころになっているのではないかと、府中に行くたびに思われます。

市内の中心部以外も、どんどん住宅地として開かれて姿を変えてきています。市内には確かに農地はあるけれども、例えばハケ下が農村部だったという印象は薄くなっています。そしてその変化の度合いは、府中の場合非常に激しいようです。もちろん農村的な景観はあるし、郷土の森の周辺にもまだまだ牧歌的な感じの景観は残っていますが、同時に商業施設や一般住宅

も建ち並んでいるし、そういうところには大都市・東京の郊外の印象がすごく強いです。

大國魂神社が府中の中心だからこそ絶対的な存在感を示すという構図は祭りのときにこそ最大限発揮されますが、実際には人々は府中に対して何を思い何を感じているかということをもっと掘り下げて聞いてみたいと思っています。というのも、新宿という都心を起点とする京王線が通っていますので、それに対して「自分たちは都市・東京の周縁、周辺のところ暮らししている」という意識なのかどうか……。そういう人も少なくないようですが……。郊外のような都市周縁部というのは、農耕的な生活文化と都市文化のせめぎあいのようなものが起こっている場所で、これは東京のいたるところで見られる現象です。しかし、はるか昔から都市拠点としての性格を持ちあわせてきた府中では、自らの生活空間に対してどのような意識が形成されるのか、とても興味深いものがあります。

京王線から見ても府中は「川向こう」ではなく川を渡るちょうど手前で、そこには競馬場やラグビーのトップチームのように人を集める拠点があって、様々な意味で拠点化しています。また、各種の大きな工場や刑務所もありますが、そうした施設ができるのは多くは都市のはずれです。東京の丸の内や銀座・日比谷にはつきりません。

私自身が都市の周縁部研究を行なってきましたので、その意味でも府中は大変興味関心を引く場所です。府中にそういった施設が置かれていったということを都市化の過程の中で見直すことによって、府中という土地の特色を見出すことができるはずです。ある部分、近現代史と重なる部分も出てくるでしょう。

これまで私自身は特に荒川区などでそういった例を見てきましたが、同じような要素が府中にはありますので、それをどのように解釈し、府中という土地の土地柄として描く作業につなげていったらよいだろうかという点は、市史本編のまとめの段階に至るまで常に思考し続けていかなければならないことだろうと考えています。

第4回 市史講演会「府中近現代史断章」開催報告

9月23日（日）に市民活動センタープラッツのバルトホールで、第4回府中市史講演会を開催し、112名の方に参加していただきました。近・現代専門部会の活動の一環として、府中にとっての近代がどのようなものだったのか、明治期の自由民権運動・昭和期の戦争の二つのテーマを切り口に近・現代専門部会の新井勝紘部会長と伊香俊哉委員にお話ししていただきました。



新井勝紘部会長には「五日市憲法」は府中が出発点だった」と題してお話しいただきました。「五日市憲法」とは、明治10年代の自由民権運動期に起草された私擬憲法で、発見されてから今年でちょうど50年となります。今回は、「五日市憲法」ができあがる背景として、多摩地域において多くの民権結社が生まれ、地域の青年たちを中心に近代的な制度や思想について活発な議論がされていたことがあげられました。また、「五日市憲法」を起草する際に参考にした「嚶鳴社憲法草案」が、府中の高安寺で行われた「武蔵六郡懇親会」をきっかけに入手されたことから、「五日市憲法」の出発点は府中にあったこと、そして府中は高安寺や称名寺などで大規模な講演会が頻りに開催されており、多摩地域における自由民権運動の中心地であったことも説明していただきました。



伊香俊哉委員には「戦時期府中の市民生活」と題してお話しいただきました。満州事変から終戦までの15年間を戦時期と位置づけ、市に残されている行政文書をもとに当時の市民の生活状況がどう読み取れるのかを紹介していただきました。今回紹介された豊富な資料からは戦争遂行のために国家が人々の物心両面で統制しようとしており、それは戦争の長期化や戦局の悪化とともに、より強固なものとなっていたことがうかがえました。また、当時の多磨村役場が残っていた資料からは、防空演習などで人々が動員されていたこと、徴兵検査から兵士の出征式、戦没者の遺骨の帰還から村葬まで当時の地域の日常をリアルにうかがえました。戦没者名簿からは、府中市域から出征した兵士のほとんどが昭和19（1944）年7月以降に亡くなったことがわかると説明していただきました。

市史編さんの活動記録（平成30年4月～9月）

継続して行っている調査等

- 近世 市内古文書目録作成・墓石調査
- 近・現代 行政文書調査・記念碑調査
- 民俗 祭礼調査、借用資料の整理等
- 4月24日 近世専門部会
- 5月18日 原始・古代考古分野会
- 6月1日 近・現代専門部会
- 7日 近・現代
たましん歴史・美術館資料調査
- 15日 近・現代妙光院資料調査
- 17日 中世専門部会
- 26日 近世専門部会、近現代記念碑調査
- 29日 民俗専門部会
- 7月1日・15日 原始・古代彦四郎塚測量調査

- 7月9日 近・現代専門部会
- 11日 原始・古代考古分野会
- 20日 原始・古代文献分野会
- 24日 自然けやき並木の気温と
クールスポット調査
- 30日 近・現代三鷹市吉野家文書調査
自然専門部会
- 8月22日 近・現代専門部会
- 29日 中世延暦寺観山文庫資料調査
- 9月15日 中世専門部会
- 22日 中世関宿城博物館資料調査
- 23日 第4回市史講演会
- 27日 近・現代専門部会
- 28日 民俗専門部会

部 会 通 信

原始・古代部会

部会全体では、現在「新 府中市史 資料編 原始・古代 文献」と「新 府中市史 資料編 原始・古代 考古 1」の刊行に向けての作業を中心にを行っています。

文献の分野会では、史料採録で集まった史料を選択し、網文・読み下し・解説をつける作業を進め、入稿に向けて準備しています。また府中市内を中心とした出土文字資料の集成作業と図面や写真の図版作成を進めています。分野会開催 6 回。

考古の分野会では、「資料編 考古 1」として旧石器時代から古墳時代までを掲載する資料編作成に向け、図版作成と解説等をつける作業を行っています。また、人々が住む上で地形は重要な要素ですが、その地形を理解していただくため、府中市を含む埼玉南部から神奈川県北部の地形を分かり易く示した地形図の作成を行っています。



〔白糸台彦四郎塚の測量調査のようす〕

さらに、中央大学と連携して白糸台 1 丁目にある彦四郎塚の測量調査を実施しました。結果、塚の時期を明らかにすることはできませんでしたが、立地などから古墳よりも中・近世の塚の可能性が高くなりました。分野会開催 1 回。

中世専門部会

中世部会では「資料編」の具体的な検討を進めています。また、文献史料については市外へ流出しているものもあり、視野を広げて調査などを実施しています。滋賀県の観山文庫にご協力いただき資料調査を行ったところ、府中の寺院に関わる記述を確認できました。仏教教学を学ぶ談議所として存在したとされる府中定光寺との関係など今後さらに追究していきます。

また、千葉県関宿城博物館の調査では、関宿

に伝存する大國魂神社（六所宮）に関係の深い文書 2 通を確認しました。中世の大國魂神社に関係するもので、当時の神社が地域や人々にとってどのような存在であったかを考えることのできる重要な史料であることがわかりました。部会開催 2 回。

近世専門部会

近世部会では「資料編」に掲載する資料の収集を進めています。宿場のしくみ、村の生活、用水をめぐる争いなど江戸時代の府中の特色がみえるような「資料編」づくりを目指しています。また、府中宿内にあった江戸時代の墓石を調査し、宿場の人びとと墓地の関わりを検討しています。部会開催 2 回。

近・現代専門部会

近・現代部会では、「資料編」の刊行に向けて編集作業を進めております。同時に調査も進めており、市内市外の各施設で調査を行い、近・現代の府中に関わる資料を網羅的に収集しています。また、引き続き東京外国語大学文書館に委託してふるさと府中歴史館で保存している行政文書の目録化を行っています。さらに、府中市史談会との協働で大國魂神社境内の記念碑の調査を行いました。部会開催 4 回。



〔記念碑調査のようす〕

民俗専門部会

市内各所で開催される夏祭り・秋祭り等にお邪魔しての実見・聞き取り調査や、シルバー人材センターへの取材を通じた高齢者活動の調査を行なっています。また、来年度の報告書刊行に向けては借用資料等の整理作業を進めています。部会開催 2 回。

「自然専門部会による市内の気温観測調査から」(調査報告)

自然部会では、市史の編さんにあたって現在の自然環境を科学的に調べてみることに取り組んでいます。部会には、気象学の専門家にも参加していただいているので、年間を通じて府中の気象がどのように変化しているのかを調べています。平成28年1月から行っている調査では、市内の小学校22校にご協力いただいて、百葉箱に温湿度計を設置して定点観測を続けてきました。

1年間の調査によって、夏の午後2時ごろの各小学校の気温データを集めて分布図にしたところ、図1のように、気温の高いところと低いところがあることがわかりました。特に気温が高いところはビルなどの建物が多い府中駅周辺で、低いところは樹木が中心の浅間山周辺らしいこともわかってきました。

そこで今度は府中駅の詳細な気温分布状況を調査しました。平成29年8月に市内の小中学生に協力してもらい、同じ時刻に気温を観測する実験をしてみました。その結果、府中駅近くにあるけやき並木沿いでは、その周囲より

確かに気温が低く、ヒートアイランド現象を抑制する“クールスポット”が形成されていることがはっきりしてきました。

この結果を再検証し、調査結果の精度をより高めるため、今年7月に第2回目の調査を行いました。前回同様に市内の中学生のご協力をいただき、大変暑い中の観測調査でしたが無事調査を完了できました。

この調査結果から府中駅周辺の気温分布図を描いたものが図2です。図2から、府中駅の周りを取り囲むように温度が高いヒートアイランドがあり、このヒートアイランドも一律に同じ気温ではなく所々にクールスポットができていることもわかりました。これは馬場大門のケヤキ並木が存在することによると思われます。

最後になりますが、調査を指導していただいた三上岳彦先生(市史自然専門部会部会長、首都大学東京名誉教授、気象学)と、気温観測にクラブを挙げて参加してくれた浅間中学校科学部の皆さんに感謝申し上げます。

図1 府中市内気温分布図

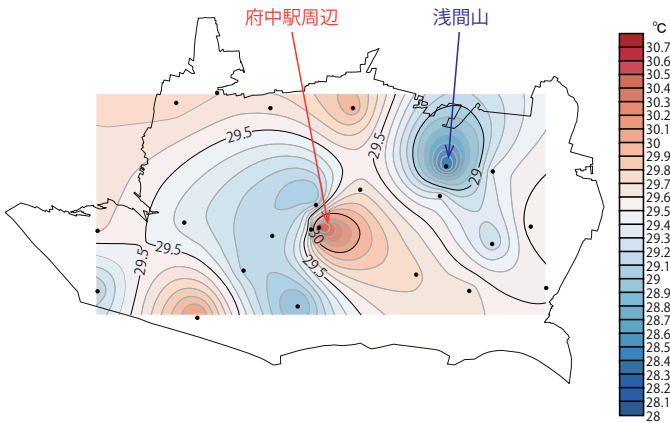
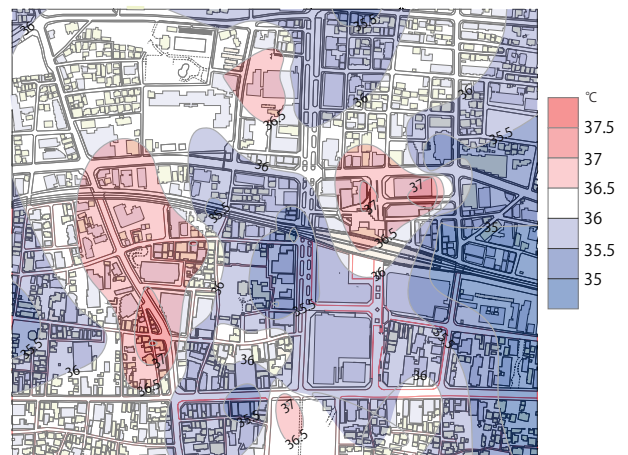


図2 府中駅周辺の気温分布図 (平成30年7月調査)



前号以降、次の皆様にご協力をいただきました。ありがとうございました。(五十音順・敬称略)

- 石川裕三、市川閲子、市川紀子、飯島周平、大熊雅弘、大野朝日、岡本暉子、許文英、後藤恵菜、小林尚子、小峰孝男、進藤礼治郎、杉田美沙紀、須田雄介、副島弘道、高野宏峰、武田真幸、立石了、種村威史、長瀬芳美、長谷川達朗、林壽子、飛矢崎貴規、古橋研一、朴澤好美、堀智博、町田昌敬、宮崎翔一、棟方鷹揚、矢島浩志
- 延暦寺叡山文庫、大國魂神社、花蔵院、公益財団法人たましん地域文化財団、千葉県立関宿城博物館、帝京大学、東京外国語大学、東京外国語大学文書館、東京農工大学、府中市史談会、府中市シルバー人材センター、本願寺、三鷹市スポーツと文化部生涯学習課、妙光院、龍光寺、公益財団法人府中文化振興財団

第5回 倉方慶明さん

府中市内にある東京外国語大学には、全国でも数少ない国立公文書館等の指定を受けた大学文書館があります。市史編さんでは、東京外国語大学文書館の協力のもと、ふるさと府中歴史館で保管する行政文書の整理を進めています。

今回は、東京外国語大学文書館研究員の倉方慶明さんにお話をうかがいました。倉方さんはアーキビストと呼ばれる文書管理の専門家です。

「平成28年度から府中市との連携事業として府中市行政文書調査・整理を行っています。整理作業では、昭和29年に府中市に統合される以前の1町2村時代(府中町・多磨村・西府村)の行政文書を対象として、件名ごとに目録を作成しています。作業には24名の学部生・大学院生が参加しました。学生たちにとっても行政文書の整理作業は普段なかなか手にする事のない歴史資料に直接触れる良い機会になりました。」

行政文書の保存の大切さをより多くの人に知ってもらいたいという強い思いを持つ倉方さん。同大学文書館は大学の歴史と教育・研究活動に関わる資料等を収集・整理・保存する専門機関ですが、学内だけではなく、地域の歴史資



料の保存に力を入れているそうです。

「これまでは大学の研究者個人が研究対象とする地域で資料の整理・保存に関わることが多く、大学としてその地域の資料保存に関わっていませんでした。最近では、公文書管理に関する法律の整備などを背景に、市町村や大学においても文書館や資料の整理・保存への関心が高まっています。こうした動きを追い風に、東京外国語大学と府中市との連携による組織的な地域の資料保存を目指せればと思います。」

地域の歴史資料の整理や保存への大学の関わり方が時代とともに変化してきているなか、府中市と東京外国語大学の取り組みが広がっていくことが期待されます。

新刊紹介

「新 府中市史 民俗分野報告書 (一) ライフヒストリーふちゅう」を刊行しました



市史民俗専門部会が調査した
市内にお住まいの方の半生の記録です。

発行日 平成30年3月 価格 1,200円
頒布場所 ふるさと府中歴史館(3階)、郷土の森博物館、
市政情報センター(ル・シーニュ5階)、
市民相談室(市役所1階)、観光情報センター

府中市史編さんだより 第6号 平成30年(2018)11月1日

編集・発行 府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課市史編さん担当

〒183-0023 東京都府中市宮町3丁目1番地 ふるさと府中歴史館

TEL 042-335-4376 <http://www.city.fuchu.tokyo.jp/bunka/bunka/shishihensan/>